

# 翻訳の面白さについて

## サンسكريット瞑想詩『プファーガヴァドジター』の語彙

カリーヌ・ガロー

### 序

言語は根源的普遍性とまたそれに劣らないほど根源的な多様性という二律背反的性格であらわれる。普遍性、というのは、あらゆる人間集団は同じ一般的性格(その主なものは表象活動のため音声的方法を用いること)の上に基づいておいた言語を持つているからである。音声的方法の有限の総体である言語を用いる人間の言語活動は、動物の伝達体系(あるいは人間の別のタイプの伝達)と違って無数のメッセージを生み出すことができ、分別単位と意味作用の単位という、二つの要素を持つ。これに似たものは他にどこにもない。多様性、というのは、一つの言語を構築する人間に共通した能力は、観察の段階では、

普遍的かつ生物学的に当然の形としては現れない。言語活動はよくこうして、一つの伝達方法と定義されるが、言語活動の成立根拠となつてゐる言語の多様性は、異なつた言語集団に属する人々同士はコミュニケーションができないという結果を生む。言語活動能力をつくりあげてゐる普遍的性格とは逆に、言語は根源的に、その社会性(というのは、言語は人類の一部だけに関わつてゐるのであつて、例えば叫び声のように、種の全体に関係してゐるのではない、ということだが)に特徴がある。社会的実体であり、またあらゆる文化的実体と同様、種全体に關し差別・分離の実体である言語は個人を超越してゐる。メッセージが表明される言語の多様性を越え、ただ翻訳だけがそのメッセージに分け入り、言葉の行為を伝達可能なものにしようとする。翻訳意図がただ存在するだけで、伝達(普遍化)可能

な内容としてのメッセージと、それを表す(社会的)言語間の分離の可能性が、言語の普遍項の存在を前提にすることで当然視されるのである。翻訳はこのように言語にかかわるメッセージと言葉とに作用する。メッセージの内容と形式は即時的直接的関係に刻まれるのではなく、意味をもち、分節された関係、つまり言語によって形式化された関係によって機能する。あらゆる言述は、発信言語(形式化するもの)と違う構造に同じその意味(形式化されたもの)に差異が生じる。

## I 翻訳活動とそれがもたらすもの

### 1 翻訳行為のさまざまなはたらき

なぜ我々は翻訳するのか。翻訳にはいくつかの働きがあるが、主なものは次の三つである。まず第一に、われわれは、言語の障壁のため直接接触できないあるテキスト(口頭のものであれ、書かれたものであれ)を、ある人々に身近なものにするために翻訳する。テキストの発信者と受信者との間に仲介者が入るこの翻訳は十全の意味で考えられねばならない。第二に、自分の言語ではない言語で発信されたメッセージを自分で理解するために翻訳する。純粹に心の作業であるこの種の翻訳は、受信者と再発信者が一人の人物のなかに混じりあっている。最後に、

初歩的修得であれ高度な修練であれ、外国語(現代語あるいは死語)の修得のために翻訳活動の無視できない一部があてられている。

第一の目的をもつ、いわゆる翻訳——その産物をわれわれが研究している翻訳——は、読者あるいは視聴者にたいする翻訳者の、言語知識についての優位性を明らかにし、言語知識の問題は解決されていることを前提としている。この翻訳作業を成功させようとしたら、語彙だけの段階にはたらしかけるのではなく、翻訳が働きかけようとするもの、すなわちメッセージそのものの段階に位置しなければならぬ。翻訳作業は語彙の段階にとどまることはできないということは、テキストの語彙とこのテキストに含まれているメッセージは、一方が一方に収斂されてしまうのではなく、この二つは、ふつう考えられている以上に複雑で直接的ではない関係で結ばれていることを暗に示唆している。これはつまり、メッセージは、その言語的構成要素であるすべての意味記号におさまるのではない、ということである。翻訳は原テキストに、意味、文体、詩情、リズム、文化、実際面において等価の対テキストを出現させる。コミュニケーションの特異なケースである翻訳はメタ・コミュニケーションであり、この二次的コミュニケーションは、一方の言語から他の言語へと、翻訳の対象である一次コミュニケーションに関わっている。原言述の客体化を行い、それを総体化してそれを対象言語に翻訳すべきメッセージ内容にし、原言述と翻訳

の双方の言語を接触させると、翻訳メタ・コミュニケーションによって、原言語による一次対象コミュニケーションが一つの社会言語の与件になってしまふのである。この際、この一次コミュニケーションと二次コミュニケーション(翻訳)とに間には干渉が生じる。というのは、意味の形式化の二つのシステムと二つのコードが関係しあい、メッセージを横断して作用し合うからである。言語を形式化モデルとして見た場合、翻訳と言語干渉はどんな関係を持ち合うのだろうか？ 翻訳の中、そして翻訳によって生じる干渉の研究は非常におもしろい。その研究によってわれわれは意味範疇が普遍的でないこと、またこの意味範疇をある言語から他の言語へ移すことが出来ないことを知ることができるからである。しかし、この研究をもって翻訳研究自体に置き換えることはできない。実際気付くことは、干渉は、メッセージ(意味)としての言述の翻訳から生じるのではなく、テキスト(意味されたもの)としての言述を翻訳する試みから生じる。言述としてのテキスト(つまり言語システムから生まれた言葉の鎖のようなもの)とメッセージとしてのテキストとが対応しないことは、こうしたコミュニケーションの条件が考慮されてはじめて明らかになる。実際メッセージの意味は、それを言葉に表すのに用いられている意味記号の総和と同価のものではないので、言葉の単位の単なる置き換えを翻訳とみなすことはできない。言述を構成する意味記号を調べてみただけで意味がわかったと思うのは間違いだらう。おおよっぱ

に『翻訳』と呼ばれるものは、記号体系とメッセージにかかわる二つの言語活動の間に位置し、意味の分野において、言語の領域とメッセージの領域の間に区別をつけるものである。というのは言述とは、特化された『意図』だからである。さらに、厳密に言って言語を構成しているものはこの意図そのものではなく、形式化することでのこの意味を媒体化するものである。言語学者と翻訳者にとつて大事なことは、各言語に内在しているこの形式化をみつけどすことであり、また、一つの『意図』が翻訳によっていかにして一つの形式化を逃れて別の形式化を採用するかを見ることである。二つの言語の二つの言述、あるいは記号(言述の最小部分)を前後関係のない絶対状況のなかで比較できるのは、これらがコミュニケーションにおいて同じ役割をはたすからである。逆に言えば、ある具体的なメッセージにおいて、ある記号が翻訳語としてふさわしいかどうかをはかることができるのは、違った言語の意味記号がそれぞれのなかに、相互置換力を持つているからである。二つの言述とそれを構成している記号間において、それぞれのレベルで等価であるということは、翻訳以前から存在しているのではなく、翻訳から生じることである。翻訳等価性への適応範囲を狭めてみるために、違った言語の記号を比べてみることは、『言われたもの』を比べるのではなく、『言われうるもの』の媒体を比較することである。翻訳は、理論的には等価とは考えられない記号間に等価性、あるいは置換可能な要素を、メッセージの仲介に

よって打ち立てる作業であり、二つの言語の記号の間に前からあつた等価性から生まれるのではない。

## 2 翻訳行為のさまざまな形態

翻訳とは、書かれたものへのわれわれの関係の深さを示す装置としてあらわれる。逐語訳対自由訳(意訳)という問題がこうして生じる。ジャン・ルネ・ラドミラルにならつて、『典拠派』翻訳者と『ターゲット派』翻訳者の仕事の間の視点の違いを考へてみよう。典拠派が典拠としての言語を優先した言語表記に執着する一方で、ターゲット派が強調するのは、音声記号はもろろん意味記号でさえなく、『意味』、それも言語としての意味ではなく、話し言葉、言説なので、ターゲット言語固有の方法をはたらかせて訳出することになるだろう。翻訳作業とはさまざまな困難を引きずつた複雑な形態を帯びている。

## 3 翻訳行為の障害

翻訳作業から生じる困難は二つの軸で分けられる。一つは翻訳の正当性の問題であり、もう一つはもっと広く、この作業の意味論的側面、語彙論的側面に関わる。

## 3-1 先決問題

翻訳の問題は、逐語訳と、いわゆる『自由訳』と呼ばれる文学的訳、別の言葉で言えば、忠実と上品さ、文字と精神というアカデミックな議論の二律背反の言葉でもつてしばしば論じられる。一つの選択肢のこの二つの極は、限りなく言い換えられ、『形式的等価性』と『動的等価性』の間をうごく振り子運動のように翻訳史に区切りをいれてきている。ところで原典をターゲット言語での『同じ』テキストで置き換えるものとされていく翻訳の目的とは、原典を読まずにすませる、ということだ。

ここに透けて見えてくるのは『同一性』(これをむしろ「等価性」と呼ぶことにするが)という問題であり、翻訳のあらゆる難しさはすべてここから生じている。前述したとおり、翻訳とコード変換とは近いものだが、そこではメッセージ(言述)が解読され、再解読される前に、われわれの目の前に原コードのかたちであらわれるので、あらゆる翻訳論は『同』と『他』という古い哲学的問題にぶつかる。ターゲットテキストは厳密に言つて原テキストではない。しかしまったくの別物でもない。この議論は翻訳のもう一つのパラドックス、翻訳不可能性の問題に逢着する。

翻訳の『状況主義論』を困らせている翻訳の文化的障害の向こうには、もっと一般的な問題として、意味記号がそのもの以外のいかなる指示対象によつても担保されない、というメタ言

語（ある言語を記述するだけに使われる言語）の問題が生じる。こうしてこの翻訳の問題の広がりをも十分に提起することになるのは哲学、またさらに言えば、詩である。われわれは音声記号の形の翻訳不可能性と、文化的特異性の領域にある、文学的、修辭的、韻律的形態の翻訳不可能性という、二重の不可能性にぶつかることになる。したがって、意味や韻律よりも、詩によってわれわれに引き起こされた効果、「詩的役割」を翻訳することが必要となるが、これは翻訳者の主体性を注ぎ込んで得られるものであり、翻訳者は以後、通訳、また「共著者」あるいは「共作者」の様相を呈することになる。ここにあるのは詩という翻訳不可能なものに、詩ではなく、翻訳可能なもの、すなわち散文、文学的ではない言説を対置するという、二分法、二元論である。この対置案によって個々のエクリチュールの二つのタイプと、科学と観念論を対比させる認識論的分割との類推による文学的分割である、二つの言説型式とが分けられる。哲学は「科学」である。したがって翻訳可能である。もつと一般的に言えば、これはまた、あらゆる伝達言説、知、知識、つまり情報を運び、この知識の伝達を第一目的（そればかりというわけではないが）としているあらゆる言説の場合であり、詩ではないあらゆるものの場合である。「バガヴァドジター」（ヴィシヌ神の化身、クリシユナによって歌われた神智的詩歌）を考える時の最初のむずかしさは、この歌は（韻文）詩に似ながら、ある教え、哲学的な論を成していることにある。

先に考えておかねばならないこの対置案は、特にそこだけというわけでさえないが、翻訳の実際の難しさのみに関係しているのではない。これは総合的知的立場の反動にほかならず、ある観念的分野の枠内にその場が割り当てられていて、そこで意味が示され説明される。いずれにせよ、この問題はきのうに始まったことではない。そこにはあらゆる知的伝統がある。翻訳は時間的にも空間的にも、普遍的な人間の活動である。翻訳はあらゆる時代に必要であった。バベルの塔の神話も翻訳という問題がいかに古いかを示している。現在、翻訳は言語が生き延びるための条件の一つを示している。ドイツ語に対するルターの聖書の例が示しているように、翻訳によって言語が生き、さらには生まれることができる。文体的豊かさに関しては、翻訳によって言葉に、新しくエキゾチックな音調さえ開発され、独創的な文学が以後それを用いることができるようになるだろう。

### 3-1 「世界観」に刻印される翻訳活動

言語の構造は長い間、一方では世界の構造に、他方では人間精神の普遍的構造に多少なりと直接的に由来するものであると考えられてきた。言語に名詞や代名詞があるのは、宇宙には存在物があるためであり、動詞があるのは宇宙には物事の過程があるから。また言語に形容詞があるのは宇宙には事物の特性があるからであり、副詞があるのは過程の質、特性それ自体の形

容があるから。前置詞や接続詞があるのは、宇宙には事物であれ、過程であれ、事物と過程間であれ、依存、付与、時、場、状況、等位、従属といった論理的関係があるからだ。問題のこうした解決の仕方は、人間の思考はどこでもまたいつでも、宇宙の経験を普遍的論理あるいは心理的な枠組みで分ける、ということ为前提にしていた。すべての言語は互いに意志を通じあわねばならない。というのはそれらの言語が語っているのは同じ世界、同じ人間経験なのだから。

この説はヴィルヘルム・フォン・フンボルトの仕事、なかななく、彼のネオ・カント派、あるいはネオ・フンボルト派の後継者の仕事によって完全にひっくり返されてしまった。フンボルトの考えは次の通りである。人間の精神生活の内容とその言語型式は相互に条件付けられていて、分けて考察することはできない。言語は、個人が世界を見、それを内在化させる形式の表現である。この考えはヨスト・トリアーによって取り上げられ次のように表現されている。「それぞれの言語は、客観的現実を通じ、またそれを代償にした、一つの選択システムである。実際、それぞれの言語は、完全に自足している現実の一つのイメージを作り上げている。どの言語も自己のやりかたで現実を構造化し、そのことによって、この任意の言語に特有の現実要因をつくり出す。ある言語におけることばの現実要因は、他の言語ではまったく同じ形では決してあらわれないし、また現実の直接的コピーでもない。」

そうすると、それぞれの言語は他の言語システムとは異なつた、大きな構造システムということになり、その中に文化様式に従つて形式や範疇が並び、個人はそれによって意志を通じるだけでなく、自然を分析し、ある種の現象や関係を認めたり無視したりするのだが、その現象や関係のなかに人は自分の考え方を流し込み、それによって世界についての自分の知識の殿堂をつくりあげるのである。われわれの世界観がわれわれの伝達の仕方に影響を及ぼすとしても、われわれがまるで世界について、二つの違つた言語で語っているかのように、ある言語から別の言語への翻訳を不当なものとしてしまふようなこの説は、まったく穏当ではないものように見える。

もっと科学的に言うと、世界の構造は言語の普遍的な構造に機械的に、つまり論理的に反映されているとはとても言いがたい。しかし、それぞれの言語には経験データの特殊な組織化が対応している、という説は言語学者に十分に受け入れられている。言語は伝達の道具であり、それによって人間の経験はそれぞれの共同体で違うように分析されている。この確認から出発して、人間の経験の表現で主導的な役割を果たし、またその奇妙さによって翻訳行為の最初の障害の一つとなつている語彙について考えて見るのはおもしろい。原語の同じテキストをそれぞれ関係するいくつかの対象言語に翻訳されたものを——語彙的材料という特殊な観点から——検討してみることによつて現実、人間経験の区割りは言語によつて違うことを証明したいと

思う。

訳者注記

原文は Karne GALAUD (リモージュ大学) の同名の DEA 論文 (Tozal 6 号取載)。序文の翻訳理論に関する部分だけを訳出した。序文全体の約三分の一にあたる。生硬な原文で訳出に大い

に苦労したが、フランスの現代の若い学生のみじめな思考が快い。本文はサンスクリット神学詩の翻訳に関する諸問題を扱ったものである。フランスは現在、ふたたびアジアの古い文化に対する興味が強くなって来ていることを実感する。この論文指導者は八八年、言語文化研究所第一回招待研究講座講師として来日され、ホメーロスのゼミを聞いて下さった Jean-Pierre Lavel 教授。

(翻訳 工藤進)